

令和7年度 福島大学基金研究推進事業助成による成果報告書

令和7年11月4日

学 長 殿

所属部局・職名

(所属・学年) 行政政策学類・准教授

申請者名

(学会発表助成の場合は参加者名)

阪本尚文

<p>助成の区分 (該当するものに○)</p>	<p>学会発表助成・学術出版助成・学術論文発表助成</p>
<p>研究活動名</p>	<p>東アジア日本研究者協議会第9回国際学術大会(韓国・翰林大学)</p>
<p>成果の概要</p>	<p>パネル「戦時下の日本における社会科学の諸像——内地と外地における知の位相」に参加し、大塚久雄と並んで比較経済史研究を牽引した、戦後日本を代表する西洋史家、高橋幸八郎について、下記のような報告を行った。</p> <p>アナール学派の黎明期を担うマルク・ブロックやジョルジュ・ルフェーブルとの親交を通してその理論に早くに通じるとともに、英語圏で展開された「封建制から資本主義への移行論争」において独自の論陣を張った高橋は、1941年秋に京城帝国大学に着任し、アジア・太平洋戦争期に植民地朝鮮で学問的基礎を積んだのだが、生涯を通じて当時について語ることはほとんどなく、この時代の高橋の思想と行動は、闇に包まれてきた。そこで、本報告では、高橋の「京城」経験を、近年遺族から福島大学附属図書館に寄贈された日記やそれを基に発見された新史料に拠りながら、検討することを目指した。具体的には、①高橋が現地の新聞において「大東亜戦争の世界史的意義」を積極的に喧伝していた、②国民総力朝鮮連盟の依頼を受けて朝鮮各地で「大東亜戦争の世界史的意義」を講演して回っていた、という事実を摘示したうえで、③宣伝戦を戦ったことへの「罪の意識」が戦後の朝鮮への沈黙、さらには戦後の政治史・現実政治へのコミットメントの忌避につながった可能性を指摘した。</p>